

～令和気象に対応したコンパクトなイネづくり「適正籾数で登熟向上」！～

早生の穂肥は幼穂と葉色を確認し遅れず施用！

巻農業普及指導センター

【重点ポイント】

- 出穂期は平年より1日程度早いと予想される（下表参照）。
- 早生の穂肥は、分施栽培では幼穂長と葉色を確認して遅れずに施用する。
全量基肥栽培では、飽水管理で穂肥成分の溶出・稲体への吸収を促す。

1 生育状況

- ・6月19日現在の生育状況（対指標値）

コシヒカリ（連休移植）：草丈「やや長」、茎数「並」、葉数「やや早」、葉色「並」

コシヒカリ（中旬移植）：草丈「やや短」、茎数「少」、葉数「やや遅」、葉色「並」

こしいぶき：草丈「並」、茎数「並」、葉数「並」、葉色「やや濃」

水稲生育調査結果（6月19日現在 巻農業普及指導センター管内調査データ）

品種名	移植日	草丈 (cm)		茎数 (本/m ²)		葉数 (L)		葉色 (SPAD)	
		本年値	指標比	本年値	指標比	本年値	指標差	本年値	指標差
コシヒカリ(連休移植)	5月4日	41	105	370	98	9.0	0.4	39.7	-0.3
コシヒカリ(中旬移植)	5月13日	37	95	287	76	8.1	-0.5	40.4	0.4
こしいぶき	5月4日	39	101	445	100	9.2	0.2	43.7	1.7

※コシヒカリ連休移植(=5/7以前移植)は巻普及センター管内14ほ場、中旬移植(=5/10以降移植)は4ほ場、こしいぶきは4ほ場の平均値

2 出穂期予想（6月19日現在）と穂肥施用

(1) 早生品種の分施栽培：幼穂長と葉色を確認し、遅れないよう2回施用する。

(2) 早生品種の全量基肥栽培：穂肥時期は飽水管理で穂肥成分の溶出・吸収を促す。

(3) 後期栄養確保の対応（分施栽培、全量基肥栽培とも）

：葉色が目安より薄い場合やその後の低下が予想される場合は、出穂期頃までに窒素1kg/10aを目安に追肥を行う。

<幼穂形成期・出穂期の予想と穂肥時期の目安>

※移植日：5月3～6日頃を想定

品種名	幼穂形成期 ^{注1} 月/日	出穂期 ^{注1} 月/日	穂肥時期 月/日(出穂期前日数)		2回目穂肥 時期の葉色 めやす(SPAD)	2回の合計 施用量 ^{注2} N kg/10a
			1回目	2回目		
五百万石	6/25	7/18	6/28(20)	7/6(12)	38	1.0～2.0
わたぼうし	6/27	7/20	6/28～30(22～20)	7/8～10(12～10)	38	2.0～3.0
ゆきん子舞	6/28	7/21	6/26～28(25～23)	7/7(14)	36～38	4.0～6.0
こしいぶき	6/30	7/23	6/30(23)	7/9(14)	36.5	2.0～3.0
こがねもち	7/6	7/29	7/11～14(18～15)	7/19(10)	32	1.0～3.0
連休植 コシヒカリ	7/10	8/2	7/15～18(18～15)	7/23(10)	32	1.0～3.0
5/10植 コシヒカリ	7/12	8/4	7/17～20(18～15)	7/25(10)	32	1.0～3.0

注1：幼穂形成期は、幼穂長1mmを超える茎が調査区全体の8割以上を占めた日で、出穂期の23日前頃。

幼穂形成期・出穂期予想は、天候により前後するので、幼穂や生育状況をよく確認する。

移植日が5日前後すると幼穂形成期・出穂期は1～2日前後する。

注2：砂壤土などの地力の低いほ場では、窒素成分で1kg/10a程度多めに施用する。

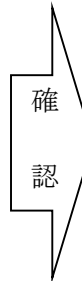
<穂肥診断> ～穂肥時は幼穂と葉色を必ず確認し遅れずに施用！～

1回目穂肥時の生育量の目安

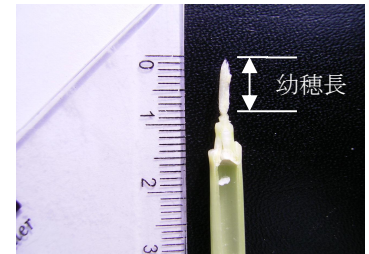
	こしいぶき(出穂期 23 日前)	注意点
幼穂長	0.1 cm	葉色が 37 (SPAD 値)より濃い場合は、1回目を施用しない。
草丈	55～60 cm	
茎数	29 本/株 (60 株/坪植)	
葉色	35～37 (SPAD 値)	

<幼穂長と出穂前日数>

出穂前日数	幼穂長
30 日前	0.02 cm
24～23 日前	0.1 cm
20 日前	0.2～0.4 cm
18 日前	0.5～1.0 cm



[幼穂の確認方法]

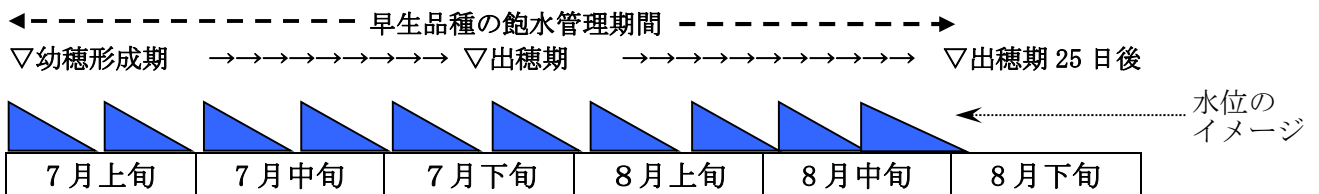


(早生は幼穂長 0.1cm を確認後、遅れずに 1 回目穂肥を施用)

3 水管理 ～ 早期落水厳禁。飽水管理で登熟向上！ ～

- ・中干しは、出穂期の 1 か月前までに終了する。
- ・中干し後は、間断かん水から徐々に飽水管理に移行する。
- ・出穂期 25 日後までは確実に飽水管理を継続し、登熟向上を促す。
- ・フェーンや異常高温が予想される時は、予め湛水して障害の発生を防止する。
フェーンが過ぎたら落水、高温が続く場合 2～3 日で水を更新し、長期間ため水にしない。

飽水管理：水尻は止水したままで、自然減水で田面の水がなくなり、溝や足跡の底から水がなくなり始めたらかん水する管理



4 病虫害防除 ～適期防除でカメムシ類による斑点米被害防止！～

(1) 斑点米カメムシ類

① 除草

- ・農道・畦畔の草刈りは、雑草が結実しないようにこまめに行う。特に、早生品種の出穂前となる 7 月中旬には、必ず実施する。
- ・本田内のノビエやホタルイはカメムシ類の増殖場所となるので、本田除草も徹底する。

② 本田防除

- ・本田防除は出穂期 3～7 日後に、ほ場全体へ薬剤散布を行う。
- ・水面施用粒剤は、水深 3 cm 程度の浅水条件で散布し、7 日間は落水しない。
- ・共同防除の実施日が出穂期から 10 日以上空くほ場は、上記防除を追加する。
- ・薬剤により散布適期・回数が異なるため、薬剤の使用方法を確認すること。

(2) 紋枯病

- ・昨年発生が多かったほ場では、薬剤の使用時期を確認し、適期に予防粒剤を散布する(箱施用剤で防除している場合は、この時期の防除は不要)。
- ・特に、多発生しやすいわたぼうし、ゆきん子舞、こしいぶきは発生に注意する。

(3) 墨黒穂病

- ・わたぼうしは発病しやすいため、必ず適期に予防防除する。